

## それでも人生にイエスと言う

2020年6月4日(木)

校長 田沢 幸夫

「人間であるということは、チャンスでもありチャレンジでもある状況にいつも向き合うことだ。」

この言葉を残したV・E・フランクル(1905-1997)は、オーストリアの精神科医で、ナチスの強制収容所を体験して奇跡的に生還した人です。収容所の体験を書いた『夜と霧』(みすず書房)という著作が有名です。

第二次世界大戦中、ユダヤ人であるフランクルは、家族と共に1942年に強制収容所に送られました。彼は約2年7ヵ月を4つの収容所で過しますが、その間に父と母、兄が亡くなり、別の収容所にいた最愛の妻は1945年4月の解放直後、再会を果たすことなく亡くなりました。家族のほとんどを喪い、押しつぶされそうな体験を重ねながら、フランクルは生還を果たしたのです。

収容所の極限状態を体験した彼は、人間が生きる意味を問い直します。そして、どんな状況に置かれても人生には意味があることを、多くの人に語っていくようになります。

彼の著作で『それでも人生にイエスと言う』(春秋社)という本も有名ですが、どんな困難な状況にあっても「それでも」人生を肯定していくというメッセージがこめられています。この本は2011年の東日本大震災の後に、あらためて注目されるようになりました。この本で彼は「人間はあらゆることにもかかわらず、困窮と死にもかかわらず、身体的心理的な病気の苦悩にもかかわらず、また強制収容所の運命の下にあったとしても、人生にイエスと言うことができる。」と語っています。

収容所の中で、自らが餓死寸前の状態にありながらも、仲間に自分のパンを与え、あたたかい励ましの言葉をかけ続けた人がいました。その人は、「人生を肯定する」ことを具体的に実践したのです。

フランクルは、人生の意味を考える視点について、「コペルニクスの転回」という言葉を使って、次のように説明しています。

大切だったのは、カントにならって言うと「コペルニクスの」とも言える転換を遂行することでした。それは、ものごとの考え方を180度転換することです。その転換を遂行してからはもう、「私は人生にまだ何を期待できるか」と問うことはありません。今ではもう、「人生は私に何を期待しているか」と問うだけです。

「生きるとは、問われていること、答えること、自分自身の人生に責任を持つことである。」と彼は言います。

この人生のどこかに、あなたを必要とする「何か」があり、「誰か」がいる。そしてその「何か」や「誰か」は、あなたに発見されるのを待っている。だから、たとえ今がどんなに苦しくても、あなたはすべてを投げ出す必要はない。あなたがすべてを投げ出しさえしなければ、いつか自分の人生に「イエス」と答えることのできる日が必ずやってくる。

「あなたがどれほど人生に絶望しても、人生のほうがあなたに絶望することはない。」というフランクルのメッセージは、様々な苦しみの中にある人々に希望を与えてくれます。

カトリック教会では、聖母マリアを模範と仰いでいますが、マリアも「それでも人生にイエスと言う」という生き方をした人です。天使からイエスの誕生を予告されたとき、「お言葉どおり、この身に成りますように。」と答えました。神の計画が自分に実現するように、神に「はい」と答えたのです。マリアの生涯は、イエスの誕生から十字架上の死まで、自分の理解を超える出来事の連続でした。それでもマリアは人生の出来事をすべて受けとめ、人生を肯定しました。

聖母マリアを大切にした聖ドン・ボスコも、苦難の人生でしたが、いかなる困難な状況にあっても、人生を肯定していきました。

新型コロナウイルスのために、私たちも予期せぬ状況を体験してきました。多くの苦しみや悲しみに出会い、忍耐のいる生活を続けてきたかもしれませんが、それでも、人生に「はい」と答え、人生を肯定することが大切だと思います。そして「世の光」として、未来への希望をもって前へ進めるよう、神の助けを願いたいものです。